

「凡事徹底」より① 鍵山秀三郎 (致知出版社)

「鄙事多能」

平成4年の6月に大阪で「凡事徹底」のお話をして以来、この話を何度も繰り返してきておりますので、同じ話をするのは少し面はゆいのですが、「凡事」というものがいかに大きな力を持っているかということ一人でも多くの方に知っていただきたいと思って、こうして話を歩いております。

私を含めて世の中の人にはだれでも、特別になりたい、人より頭一つでも抜きん出て特別な人生を送りたいと思っているわけですが、これは人間だけでなく、犬でも猫でもそうで、同類の中で特別でありたいというのが、動物の本能です。しかし、間もなく還暦を迎えるこの年まで人生を送ってきて、世の中に特別なこととか特別なものは何もない、とつくづく思うわけです。

そのことを慶応大学をつくられた福沢諭吉先生は、

「鄙事多能」

と言っておられます。慶応大学というと、さぞ立派なことを教えてこられたのではないかと思うのですが、先生は鄙事(ひじ)、つまり普通の人たちが雑事と片づける細々としたこと、例えば、朝起きたら布団をたたむとか、雨戸を開けるとか、ちょっと家の前を掃くとか、そういった身の周りの雑事に対していつも多能で、器用でなければいけないと教えております。

また、芥川龍之介は、

「人生は瑣事に苦しみ、瑣事を楽しまなければいけない」

と書いております。同じようなことを期せずして二人の大家が言っているわけです。普通、芥川龍之介のような人は終日机に向かって原稿を書き、それだけで済んでいたのではないかと思うのですが、そうではなく、毎日の生活で、自分でできることはきちっとしなさいということをお願いしているわけです。

「簡単なこと、単純なことを極めていく」

私の場合はたまたま何もできなかった、特別な才能がなかったということで、才能のない私自身がこの世の中を渡っていくためには、悪いことをするか、あるいは、徹底して平凡なことをきちっとやっていくかのどちらかしかありませんでした。悪いことをする勇気がなかっただけに、鄙事を徹底して今日までやってきましたが、それが結果としては大変大きな力を持っていることをつくづく感じるようになりました。

この大きな力を持っているものを一人でも多くの方が実行してくだされば、世の中に争いごとや無理なことが起きなくなって、世の中全体がもっと余裕のある社会になるのではないかと、こうして話をしております。

これは、やればだれにでも簡単にできることを徹底して、その中で差をつけるという考え方です。ところが、簡単なことというと、「そんなことをやっていたら何もならないじゃないか。そんなことをやっていただけでは人に遅れてしまう。この競争社会の中で勝っていけない」というふうに思って、バカにしたり、おろそかにする方が人多いわけです。

しかし、そうやっていること自体が自分の人生をおろそかにしていることにつながって、結果的に十年たっても二十年たっても本当の意味での進歩につながらないと思います。

私は簡単なこと、単純なこと、単調なことをおろそかにしない。それを極めていくという考え方でやってきました。

例えば、最近のように不景気だ、不景気だとテレビや新聞ではやし立てるようになると、ご商売をされている方はどうされるか。今日も原宿の駅からここまで来る間に、時価何千万円もする高級な場所に立派なビルが建っていて、そのビルの中で、50パーセントオフ、70パーセントオフという札をデカデカとウインドーに張って商売をされていました。

私はなぜこんな素晴らしい場所でそういうことをしなければ商売ができないのか、不思議でしょうがないのです。(以下省略)

「凡事徹底」より② 鍵山秀三郎 (致知出版社)

「序のことば」坂村真民

不動の商魂、それは凡に徹することである。これさえ身につければ、お金は向こうからやってくる。これは商の常道であり、不変の哲理である。

わたしが常々言っているのは、男は何に命を賭けるか、であり、また他の人にできないことを一つでもいい、身につけること、であり、そしてこれを実践することである。

わたしが鍵山さんを尊敬するのは、この二つを持っていただけるからである。

わたしの詩に、尊いのは足の裏である、というのがあり、多くの人によく読まれ知られているが、でも本当にこれを毎日の生活のなかで実践している人は少ない。

東洋では足心呼吸という。つまり足心に心を置いて自己を見、他人を見、仕事をしてゆく観法である。こういうことも鍵山さんは身につけておられる。まさに凡中の凡である。言いかえれば非凡の人である。

わたしの好きな禅語に、万里一条鉄というのがある。これは徹することであり、持続することである。天下に名をなす人は、皆この凡から出、凡に徹しきっている。

「凡事徹底」

この四字こそ、商人道の根幹であり、運をつかむコツである。21世紀が、もうそこまでできているが、まだこれという光は射してない。英雄、偉人の時代は去った。これからの世は、衆と共に生きてゆく、そういう人が待望され、仰望されるであろう。

凡聖不二という仏語があるが、この言葉の持つ意義の深さを、しみじみと感得させる著書である。

「あとがき」

どのような方法や手段をとっても、その内容は問われず、結果さえよければ賞讃され、ますます支持されるという大きな流れの中で、結果よりもプロセスを大切にしようとする私の考えは、全く理解されることはありませんでした。

私が人切にしていこうとしていることに「掃除のような生産性のないことをやっているより、もっと経済性の高いことをやったらどうか」と非難の声が圧倒的でした。

整理、整頓、清潔ということが大事であることは世の経営者の多くが認めてはいても、それを自らの手をもって、あるいは自社の社員の手でということになると、遠ざかってしまうようです。

それは、この整理、整頓、清潔があまりにも平凡で普通のことだからであり、すぐに成果が得られないからでもあります。

現代の激しい競争の中にあっては、普通のことをやっていると他社に遅れてしまう、負けてしまうということでしょうか。

そして多くの人々は人事なことを省いて結果だけを追い求めることに夢中になっていきました。そのような風潮の中にあって、私は平凡なことに徹するという変えはしないものの、心の中では「果してこれでいいのか」という迷いが常につきまとっておりました。私の信念に誤りがあれば、多くの人達が誤った道を進むことになるからです。

そうした私の迷いをはっきりとした信念に変えてくださったのが、浅野喜起先生でした。

浅野喜起先生が結果は問わず大切なことは手を抜かず心を入れて実践する道を歩むようと、励まして頂きまして、それまでの迷いがすっかりぬぐい去られました。私の迷いなくなるのと時期を同じくして、会社の業績が目に見えてよくなっていったことが私の歩む道が正しいことを証明してくれました。

浅野喜起先生の適切なご指導とお励ましによって企業の命運を好転された方は数多く、幸運にも私もその中の一人に加えさせて頂き深く感謝申し上げます。

この本をお読みくださった方はぜひ浅野喜起先生の「喜びの発見」をお読みになられますようおすすめいたします。